

PBL 対話的事例シナリオ教育のカリキュラムと評価方法の開発

企画者・話題提供者：山田 康彦（三重大学教育学部）

話題提供者：角谷 道生（三重県立明野高等学校）

話題提供者：守山紗弥加（三重大学教養教育院）

話題提供者：前原 裕樹（三重大学大学院教育学研究科）

指定討論者：伊藤 通子（東京都市大学教育開発機構）

指定討論者：吉永 紀子（同志社女子大学現代社会学部）

司 会 者：大日方真史（三重大学教育学部）

教員養成 PBL 教育では、対話的事例シナリオを核とした最適な授業内容構成が探究されてきた。学生の学びを軸に検証するためにルーブリックやコンセプトマップを評価方法として導入し、その意義と特徴も明らかになり、受講生の「観」の変容も見出されてきた。こうした PBL 対話的事例シナリオ教育カリキュラムの構成、評価方法、そして「観」の変容に果たす役割に関する研究成果を公開し、その意義や課題について検討する。

1. PBL 対話的事例シナリオを核としたカリキュラム構成と特徴（山田康彦）

この企画研究の課題の一つは、PBL 教育を核とした教員養成授業科目のベストミックス（専門的知識・技能の形成、現場体験と理論の往還等を含めた最適カリキュラム）を創り出すことである。実践研究の結果、事例シナリオの配置の仕方によって、(1)少数事例シナリオ核型、(2)複数事例シナリオ配置型、(3)2種類 PBL 配置型の3つのタイプが抽出された。これらのカリキュラム構成の成果と課題を明らかにする。

2. PBL 対話的事例シナリオ教育カリキュラムの構成及び評価と結果—高校福祉教育分野の事例から—（角谷道生）

高校教科福祉では職業人育成の観点から、実践力の育成が求められている。実践力を観と技術から構成されていると捉えたとき、これまでの授業は知識・技術の側面から実践力を育成しようとするものが多い。そこで事例・他者・自己との対話を通し、観の自覚化・相対化・変容を促す対話的事例シナリオを用いた授業を行い、コンセプトマップを用いて内面的変化を考察した。結果として知識量の増加・専門性の向上、視点・概念の変化

や情報把握・活用能力、物事に対する姿勢に関するもの等が育まれていることが明らかになった。

3. 対話的事例シナリオ教育におけるカリキュラム開発・評価の成果と課題（守山紗弥加）

カリキュラムとは、必要な授業科目の体系的な編成を指すことが多いが、広義には学習者にとっての「学習経験の総体」を意味する。その経験においては編成の一次主体である授業者が設定・提供する教育目標—評価方法や「材」が重要な役割を担うと同時に、履修・修得の過程において学習者自身が様々な科目やプログラムでの学びを総合化し、相対化と具現化ができることが必要となる。本報告では、これまでの開発・検討における成果と課題を概観し、授業者と学習者の立場からカリキュラムの開発と評価にどのように関与できるのか検討したい。

4. 「観」の変容と PBL 対話的事例シナリオ教育の役割（前原裕樹）

「観」は、「教育観、授業観、児童・生徒観などの多様な観の集合体であって、具体的には授業要素（目標・教育内容、材、教授行為、学習者把握）に一貫性を与えるもの」とされている。養成段階において知識や技術の獲得と並行して、学習者の「観」に働きかけることも求められている。本報告では、学習者の「観」の変容を促したり、その変容を捉えたりするために、PBL 対話的事例シナリオ教育が果たす役割について説明する。具体的には、「観」の概念検討および学習者の「観」に働きかける実践研究の概観を行った上で、本研究の独自性および課題について明らかにする。